

国内経済情勢

概 観

商品市況には、引き続き底固い動きが広がっているが、その背景として、実需の漸増傾向がみられる。これにつれて、生産は一高一低ながら大勢としてなだらかな上昇に向かっている。企業の金繰りも、一段と緩和傾向を深めている。このように景気は徐々に回復をみつつあるだけでなく、先行き設備投資計画についてこのところ動意がみられる。しかし採算難などもあり、当面のところ、企業の生産や投資に対する態度はなお慎重さを失っていない。資金需要も、総じて落ち着いている。

この間、3月の国際収支は総合で7百万ドルの黒字となった。輸出は頭打ち、輸入は漸増傾向にあるが、貿易収支の基調としては、ほぼ均衡状態を続けている。

以上のような情勢の下で、本行は4月20日、金利政策を弾力的に運営するとともに金利体系の是正を推進し、金融正常化を一段と推し進める趣旨で、公定歩合をさらに1厘引き下げた。

商品市況、底固さを加う

最近の商品市況は、鉄鋼を中心に底固さを加えている。すなわち、鉄鋼は、厚板、棒鋼、山形鋼などを中心に小幅ながら続伸しており、紙、化学なども強含みを続けている。非鉄も、銅、亜鉛などが反発後ほぼ保含いを続けており、立ち直り傾向がはっきりしてきた。この間、繊維では、毛糸、綿糸をはじめ生糸、人絹糸などに若干のあやはみられるが、ひとところに比べかなり高い水準を保っている。

このように、燃料、セメントなど一部品目を除けば、市況の地合いには全般にわたって明るさが加わっている。その背景として、高率操短が守られていることはいままでもないが、輸出の堅調に

加え、このところ季節需要なども漸増ぎみとなっていることが注目される。ただ今の段階では商社やユーザーに積極的な在庫補充の動きはみられず、目先市況は徐々に強含みの度を増してゆく程度と思われる。

こうした動きに対し、業界ではなお操短を続けて市況の本格的回復をはかろうとする空気が強いようであり、生産に対する態度が大きく変わる情勢ではない。ただ化学の一部、セメント、石油のように強気の業種では引き続き増産が予想されており、鉄鋼でも好調な品種(軽量型鋼、薄板など)では、操短緩和の動きもきざしている。

3月の本行卸売物価は、繊維、鉄鋼、紙などの上昇を中心に前月比+0.2%と続騰した。4月上旬も大勢は変わらないが、銅地金の建値引下げが響いて保含となった。小売物価(東京)は、3月も食料品の値上がりから前月比+1.2%と騰勢をあらためていない。この間3月の消費者物価(東京)は、食料品の上昇が響いて前月比+0.9%の続騰となった。

生産、ゆるやかな上昇へ

3月の鉱工業生産(季節調整済み)は、2月+1.2%と目立った上昇をみたあと、1.0%の減少(速報)となった。とくに、前月大幅増加をみた大型機械(タービン、圧延機械)や耐久消費財などで、反動減が目立った。もっとも最近の動きをならししてみると、生産は月により一高一低しながらも、底入れからゆるやかな上昇に向かいはじめているものと思われる。1~3月は、資本財、生産財の増加を中心に前期に比し1.7%の上昇となった。

2月の出荷は、+3.9%と増加した。前月雪害で減少した反動(繊維、化学、窯業など)もあり、また輸向け、電力向けなどの大形機械の出荷集中などもあったので、実勢は計数ほどの急増とはみられない。しかし生産と同様、このところ需要の漸増につれて出荷も徐々に回復傾向を示しつつあるようである。

需要面の動きをみると、個人消費は、最近次第に持ち直しに向かっているようであり、一般小売店の伸びに加えて、百貨店の売上げもやや回復済みである。

一方、在庫面の動きをみると、なお業界には買い控え態度が強く、積極的な動きは弱いようである。2月の原材料在庫は1.7%の増加となったが、これは機屋筋の糸手当が中心であり、それも繊維市況の小反落もあって、一時的なものに終わったようである。

この間、2月のメーカー製品在庫は-1.5%と減少したが、雪害によって前月在庫が増加した反動もかなり影響している。在庫水準はなお高いが、薄板、金属加工機など一部には、需要漸増から漸減気配もみられはじめているようである。

設備投資は、資本財出荷や機械販売などの動きからみて、また中小企業の工事が増加しつつある点からみて、減勢もほぼ底となっていると思われる。機械受注(海運を除く民需)でも2月は前年を0.9%上回り、底入れから回復へ向かいつつあることがはっきりしてきた。引き続き化学、自動車などからの発注増加が目立つが、鉄鋼などからの発注も、きわめて低水準ながら底入れのきざしがみえる。なお、このところ企業家心理の好転につれて、石油化学、合繊、自動車など従来から強気であった部門において、38年度設備計画に動意が強まっている。もとより、それが本格的に具体化するのはいくぶん先のこととみられるが、注目される動きである。

貿易収支はほぼ均衡状態

3月の為替収支は、貿易収支が3百万ドルの黒字にとどまったうえ、貿易外収支が期末の関係もあり大幅払超となったため、経常勘定では28百万ドルとかなりの赤字を示した。しかし資本取引面で、輸入ユーザンスが増加したほか、長期資本の受入れも進んだため、総合勘定では7百万ドルの黒字となった。基調としてみると、最近の貿易収支は、ほぼ均衡状態を続けているとみられる。

3月の輸出(為替ベース)は、年度末でもあり前月を大きく上回ったが、その増勢は前年同月に比べ+6%と頭打ち傾向を続けている。品目別では、鉄鋼、機械、光学機器などが依然好調である

が、その他はいくぶん増勢が鈍っている。もっとも信用状など先行指標でみると、対米輸出の増勢鈍化がやや目立ってはいるが、総体としては、こしばらく高水準を続けるものと思われる。

一方3月の輸入は、為替、通関とも引き続き増勢を示した。原綿、原毛、原油などの入着が進んでいるほか、食料も輸入単価の高騰が響いて高水準を続けている。最近の輸入素原材料の在庫をみると、鉄鋼ではなお在庫圧縮が続いているが、業界の動きからみると、全体としては、先ごろ来買い付けた繊維原材料の入着もあり、やがて過不足感のない在庫水準となるものとみられる。もっとも、輸入関連産業の生産は漸増しており、その面から輸入水準は強含みとなろうが、当面大きくふえる公算はない。

企業の手元ゆるみ、資金需要は落着き

3月の金融市場は、銀行券の増発にもかかわらず、財政資金の揚超が前年に比べ小幅にとどまったうえ、本行の市中保有債券の買入れもあり、引き続き平穩裡に推移した。銀行券は、公務員のベースアップ分の追払いなどもあって、3月としては異例の大幅増発となった。このため月中平均発行高の前年比も、+17.2%(前月+14.6%)と上昇が目立った。なおこれには、最近における銀行や企業の金繰り緩和と、消費の持ち直しなどもある程度影響しているものとみられ、注目される。

3月の全国銀行貸出は、3,987億円の著増となった。含み貸出の関係を調整してもかなりの増加であることは否めない。貸出の内容としては、自動車、食品、家庭用電気器具などの販売資金とか、商社関係に商量拡大にそなえるものなどがみられるが、鉄鋼、機械などにおける累積債務の決済資金が中心であることに変わりはない。中小企業の設備関係資金もふえているが、ここへきて急速に増加する状況ではない。

銀行の貸出態度は、優良取引先の確保あるいは融資系列の整備などをめぐって次第に積極化しているが、企業の資金需要は、当面総じて落ち着いている。通貨回転率の低下にもうかがわれるように、企業の手元は一段とゆるんでいる。生産、投資活動に大きな動きがみられないことがその背景と思われる。